

春日部福音自由教会 2020年4月5日 主日礼拝 中央会堂

聖書朗読 マルコ15章33節～41節

「答えない神を、『わが神』と呼ぶ」小野信一牧師

おはようございます。

受難週の日曜日を迎えました。

新型コロナウイルスの感染が拡がりつつあり、何とか拡大を遅らせるために、社会全体が協力しなければならないという状況になってきています。

私たちも、教会として社会の一員として、感染拡大防止のために、人の接触や移動をできるだけ減らす、ということをしなければならない、という状況ではないか、と考えています。

私たちのお互いのいのちを守るために、そのことをしなければならないでしょう。また、教会にとって、礼拝をささげることが、不要ではありません。とても大切なものです。ですから、みなさんの信仰生活と信仰共同体を守っていくためにも、精一杯の努力をしなければならない。集まる回数や人数を減らしたり、同時に教会の礼拝堂に来ることができない時にも、礼拝に参加することが出来る方法を増やしていくということを、今、進めています。これから、集まることが少なくなる可能性があります。祈りに覚えつつ、今日も礼拝をささげましょう。

I イエスの十字架上の言葉 マルコ15:34を中心に

今日朗読されたみことばは、マルコの福音書15章の33節から41節までです。このみことばから、「答えない神を、『わが神』と呼ぶ」と題して、説教を取り次がさせていただきます。

中心のみことばは、34節です。イエス様の十字架上のことばです。「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ」「わが神、わが神、どうしてわたしをお捨てになったのですか」という、イエス様のことばが、暗い闇の中に、響きました。イエス様が十字架上で死なれる、その前のさいごの言葉として、七つのことばが聖書に残されています。そのうちのひとつです。みなさんは、自分がいつか、死ぬときが来たならば、死ぬ前に最後に何を言うでしょうか。祈るでしょうか。祈るなら、死ぬ前に、最後に何を祈るでしょうか。

私の祖母は、私が高一の時に90歳で天に召されたのですが、最後に、「主よ、私のたましいを、御手にゆだねます」と言った、そう祈った、と間接的に聞いています。そのように最後に祈れたらいいな、と思うでしょうか。どうでしょうか。でも今日のこの言葉、この祈りはどうでしょうか。これが自分の人生のさいごの祈り、さいごの言葉であったとするならば、最悪じゃないだろうか。さいごの言葉、さいごの祈りがこれだったら、「やだな、どうしよう」というような祈りではないか、なんでイエス様はこう祈ったのだろうか、こう叫んだのか、いろんな疑問が湧いてくる、イエス様の叫びです。

12時になったときに、闇が全地を覆った、そして午後三時まで続いた、と聖書に書いてあります。

今日は、イエス様が十字架に架けられたあの日、全地が暗くなったその時の様子を、思い浮かべてみていただきたいと思います。そしてその中で、闇の中に聞こえてきた、大声。そのイエス様の声に、耳を傾けてみましょう。

12時から、三時間、暗いままであった、その中に、大きな声が響きました。「エロイ、エロイ、わが神、わが神、レマ、なぜ、サバークタニ、わたしを捨てたのか！」そんな声が、響いてきます。暗い中で、イエス様の叫ぶ声がします。「エロイ、わが神、わが神、なぜですか！なぜ、わたしを捨てたのですか！」イエス様が暗い中で、そう叫ばれた。これは、私の叫びだ、突然そう思えてくるような思いになりました。

これは、皆さんの叫びだ、みんなの叫びだ、といってもよいでしょう。みなさんは、どう思うでしょう。この、皆さんの叫びの言葉、これは私の叫びだ、と思うのでしょうか。「わが神、わが神よ、なぜ！」このイエス様の叫びの言葉を、これは私の叫びだ、と思うのでしょうか。「わが神、わが神よ、なぜ私を捨てたんですか！」こういう叫びです。なぜですか！イエス様が叫びます。ああ、このイエス様は私だ、このイエス様の叫び嘆きは、私と一緒にだ、そう多くの人と思うのではないか、そのように、このみことばを、思い巡らし耳をすまそうとしたときに、突然思えてきました。

いま世界と日本と私たちの周りの人たちのなかに、共通の悩みがあります。共通の嘆きや恐れがあります。この新しいウイルスが、その感染が拡がらないように、自分のところに来ないように、自分の家族がかからないように、そしてこの社会の人たちのなかで、高齢の方や病気を持った方がかかって、重症になったり亡くなる人が増えないように、恐れつつ、多くの人があることを考え、悩んでいます。

それと同時に、個人個人、ひとりひとりに個別の悩み、苦しみもあるでしょう。ある人にとっては自分の家族の悩み、自分の仕事の問題、自分の病気のこと、「なぜですか！」と叫んで、声になる時にならない時も、その叫びに対して、答えがない、「なぜですか？」と問いかけても、答えが得られない、そういうときを人生の中で、通ります。その叫びを、イエス様が叫んでくれている。私と一緒にイエス様が嘆いて、叫んでおられる。私の叫びを、私の友の叫びを、私の家族の叫びを。イエス様は、私たちが嘆くとき叫ぶとき、一緒に嘆き、叫んでくださいます。

これはある意味では、人類全体の叫びなのかもしれません。みんな嘆いて叫びます。答えが得られない、でも空に向かって、上に向かって、「なぜ私を捨てたのですか！なぜ私を見捨てるのですか！」人類最初の人アダム、アダムはこの言葉を、空に向かって上に向かって叫ばなかったのでしょうか。エデンから追放された後に、追放された迷子のアダムはきっと、こう叫んだのではないか。あるいは叫びたい思いだったのではないか。「神よ、なぜ、私を捨てたんですか。顧みられずに園から放り出され、道端で途方に暮れて、倒れています。しゃがみ込んでいます。神よ、この思い、分かりますか？」アダムはこんな思いだったのではないか、そしてアダムから私たち人類の歩みの中で、こんな風に、私は顧みられていない、捨てられている、そう思ったことがある。アダムから私まで、アダムからあなたまで、全人類の叫びを、イエス様が叫んでおられます。その声を、今日私たちは聖書を開いて読み、今日、イエス様の声を聞くのです。「わが神、わが神、どうしてわたしをお捨てになったのですか」イエス様が、私たちとともに、嘆き、叫んでおられます。共に嘆いておられます。

Ⅱ まことの人、まことの神による「なぜ捨てた？」という叫び

この十字架の場面に、百人隊長という、ひとりの軍人が出てきます。そして彼は、言います。「じつに、たしかに、神の子であった。この人は、この人間は」と言うのです。この軍人は、イエス様の正面に立っていた人です。おそらく朝九時頃、イエス様が十字架につけられ、12時に暗くなり、3時まで時間が経過する、その間ずっと立っていたのではない

かと思えます。あるいはその前から、十字架の前から、その前の夜から、ローマ軍の処刑実行部隊の、現場責任者というのでしょうか、その人が「この人は、ほんとうに神の子であった、この人間は、ほんとうに神の子であった」と告白したのです。ですから、この39節の言葉、百人隊長のある意味での信仰告白のようなこの言葉は、マルコの福音書のもっとも大切な言葉、と言われるものの、ひとつです。「まことの人である、まことの神である」とこの人は言っている。そのまことの人、まことの神であるイエス様が、叫んでいるのです。なぜ、わたしを捨てたのか、と。なぜ、捨てたのですか、と神に向かって問いかけて、そして答えは返ってきません、答えが来ないのです。答えがないまま、イエス様は死んでいかれます。捨てられたのです。捨てられたまま、完全に捨てられたまま、イエス様は死んでいかれました。

このイエス様の叫び、なんと不思議な言葉だろうと思う、この叫びは何だったのだろうか。ひとつには、嘆きです。イエス様は、嘆いておられる。捨てられて、顧みられず放置され、悲しんでおられます。私たち人間と同じ、さみしさ。なぜ放っておかれるのですか、というかなしみを、叫んでいます。

イエス様の十字架の隣にいた人は、我々は自分のしたことの報いをうけているのだから当然だ、裁かれて当然だと言いました。実は私たちひとりひとりが、そのように裁かれて当然な存在なのです。私たち人間は、みな羊のように迷って、おのおの自分勝手な道に進んでいった、それが、迷える罪人の私たちです。でもそのような迷える私たちではなく、イエス様が捨てられているのです。何も悪いことをしなかったイエス様が、捨てられているのです。耳を傾けると、イエス様のかなしみ、嘆きの声が聞こえます。「わが神、わが神どうして私を捨てたのですか」。神の御子が、本来悲しまなくていい悲しみを、嘆き、叫んでおられます。「捨てられている」ということは「裁かれている、審判を受けて断罪されている」ということでもあります。神のさばきをイエス様は十字架の上で受けて、裁かれて捨てられているのです。裁かれるとは、神の怒りが注がれている、と言ってもよいでしょう。「捨てる」という言葉がここにあります。「わが神、なぜわたしを捨てたのか」。神さまが人間を捨てるということがあるのでしょうか。

神さまが私たちを見捨てると言うことがあるのでしょうか。旧約聖書のなかに、神さまが人を捨てる、あるいは民を捨てる、ということが時々出てきます。なぜ、どういう時に、神さまは民を捨てるのか。それは、人が、神を捨てたときです。人の罪とは何か。それは、神を捨てたことだ。造り主の神を、私には不要だ、必要じゃないものだ、として、こんな神さま信頼できない、頼っても仕方がないと投げ捨てる、民が神を捨てる、その結果なのです。神が民を捨てるのは。もちろん、長い忍耐と働きかけの後で、そういうことが起こる。ということがあった、ということです。

例えば、放蕩息子は、父を捨てたんですね。父への尊敬を捨て、感謝を捨てました。家も捨てました。「お父さん、私にはお父さんはいなくてもいいです。お父さんの財産はもらいます。でもお父さんはいなくていい、いっしょになくていい、出ていきます」。彼は、父を不要だと考えた。父や家や家族は、自分にとって不要なものと考えて、国を捨てて、遠い国へ行きました。そしてこの放蕩息子はあとになって、我に返ります。我に返って、「天にもあなたにも罪を犯しました」と言います。どんな時にいったい神が人を捨てるのか。それは、人が神を捨てた時だということです。神さまは、ご自分のことを、無視し、いなくてもよい、いなくてもやっていける、不要だと考えて、ご自分を捨てた人間をどうするのか、最終的には神さまは、それまでに神さまは、語りかけたり働きかけたりいろいろ

ろしますけれども、もし最後まで人間が神を捨てるならば、神さまは人間を捨てるしかありません。捨てなければ、捨てねばならない、裁かねばならない、そういうことになるのですね。

でも、「捨てたくない！」これが、神のおこころです。おろかな、滅びゆく人間、迷って死んで行く人間たちを、「捨てたくない」「惜しい」と思ってください。迷いゆく、死にゆく人間を惜しんで、それで、父なる神は、いまこの場面、十字架の上で、ご自分の御子を捨てておられます。私たち人間を捨てる代わりに、罪のない、ひとり子を捨てておられます。それがここで起こっていることです。「わが神、わが神、どうしてわたしをお捨てになったのですか」。父が、御子を捨てるということが、正しいことであり、神のご計画であり、父の望まれること、イエス様がゲッセマネの園で祈りました。「わたしが望むことではなくて、あなたがお望みになることを」と。その父のお望みになること、そしてイエス様が、「わたしはそれに従います」と言ったこと、それが、これだったのです。「父が、御子を捨てる」ということだったのです。

今日の交読文は詩篇22篇でした。ご一緒に読むことは出来ませんでしたけれども、あとでぜひお読みいただきたいと思います。旧約聖書のイザヤ書に53章、本当は全体をお読みしたいのですが、今は6節のみをお読みいたします。先ほど、6節の前半に少しふれました。「私たちはみな、羊のようにさまよい、それぞれ自分勝手な道に向かって行った」。そして6節の後半「しかし、主は私たちすべての者の咎を彼に負わせた」。主は、私の不義を、彼の上に置いた、彼に負わせた、というのです。文語訳では「しかるに、主は我ら全てのものの不義を、彼の上に置きたまえり」とありました。主は我らの、私の、あなたの不義を、彼の上に置きたまえり。

それで今、彼、キリストは、叫んでいるのです。捨てられているのです。咎をおわされ、不義を自ら負っています。それで彼は、十字架の上で裁かれ、殺され、死刑になっています。私が背負っているはずの、私の上にある咎が、私の頭上から取り去られて、私の頭の上から持ち上げられて、どこかに持って行かれてなくなってしまった、どこかに行ってしまった、私の上にはもう何も咎がない、不義がない、その「どこか」が、イエス様の上だったのです。私が負っているはずの咎と不義が、私の上から取りはずされて、イエス様の上で置かれたのです。だからイエス様はこう叫んでいるのです。だからイエス様は捨てられています。だから、イエス様のこの叫びは、私と無関係ではありません。

捨てられるとは、神の怒りが注がれるということです。神の怒りが入った杯が、だんだんだんだんいっぱいになったらそれがぶちまけられる、それが回ってきて、みんなが飲まなければいけない、すべての民が、すべての神の民が飲まなければならない神の怒りの杯が、私に回ってくるはずのその杯が、イエス様に差し出されました。そして、イエス様おひとりが、その杯を飲み乾してくださったのです。神の怒りをぜんぶ飲み乾してくださった。「ほんとうに神の子であった」この人が、飲み乾したのです。ですから神の怒り、私たちに飲ませるべき神の怒りは、もう残っていません。怒りの杯は、もう乾されています。飲み乾され、空になっています。私たちに、杯が回ってきたとしても、もう空なのです。神の怒りを飲め、とは言われたいのです。むしろ、赦しといのちの契約の杯を、イエス様は私たちにさし出してください。今日は月の第一週で、聖餐式の予定でしたが、聖餐式は行うことができません。しかし、「わたしを覚えてこれを行いなさい。これはわたしの血による契約である」と言われた杯は、神の怒りの入った杯ではなく、イエス様のいのちが入った杯です。それを私たちは、いただくのです。

さて、イエス様が、「なぜ」と叫んで答えを得ずに死んでいかれたことをもう一度見てみましょう。私たちはたとい、この世で「なぜ」という問いに答えがなくてもよいのです。もしかしたら、答えを得ないまま、世を去って行くかもしれません。「神さま、私の神さまなぜですか？なぜ私を見捨てるのですか、なぜ答えないのですか、私はわかりません、なぜ、いま助けが来ないのですか、なぜあの時答えが来なかったのですか、なぜなのかわからない」と神さまに訴えることがあるかもしれません。そうして「なぜですか」、と投げかけて、「こうだからだよ」、と神さまからの答えを受け取ってないのに、死んでいくことになるかもしれない。

イエス様の姿をみて、そうなくても大丈夫なんだ、と思うのです。「あなたは私を捨てておられます」とイエス様は叫びました。私たちも、イエス様に「あなたは私を捨てておられます。私を顧みてくださっていません」と叫ぶほかない時があります。でも、その中で、イエス様が答えがないなかで「わが神」と呼んだ、ということを思い出しましょう。

Ⅲ 答えがないなかで、「わが神」と呼ぶ

イエス様は、「なぜ」と問うてこたえてくれない神様を、「わが神」と呼んだのです。「答えはないけれど、あなたは応えて下さいません、あなたは私を捨てておられます。それでもあなたは私の神です。わが神、わが神」と呼んでいます。この神は、いま十字架の上で、自分を捨てている神です。それでもイエス様は、その神を「わが神」と呼んだのです。それが、イエス様でした。私たちも、答えのない時、わが神と呼びます。答えがないんだったら神さまに祈ってもしょうがない、答えがないんだったらもうわが神とは呼ぶのはやめよう、こんな神はもう神ではないと言って「わが神」と呼ぶのは止める、ということをしなくてよいのです。答えがないまま、死ぬまで、もちろん、それぞれの人生死ぬまでの間には、色んなことでお祈りして、祈りが叶うこともあるし、叶わないこともあるし、答えがあることもあるし、ないこともあって、両方あって、生きていくでしょう。でも最後の最後になって、死ぬときまで答えがなくても、神を「私の神よ」と呼び続けるのです。そうやって、世を去っていきましょう。

神さまは私を助けてくれなかった、答えをくれなかった、と思うときがあるかもしれませんが、捨てられて死ぬ、答えなく死ぬ、こんなに最悪でみじめな死はないと思えるのですが、でも私たちは、それでもその中で「わが神」と呼べるのです。神を「わが神」と呼ぶのを止めてしまわないで、呼び続けることができるのです。イエス様が今日、十字架の上で叫んでおられる声を、今わたしたちは聞いています。「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ」「わが神、わが神、どうして私をお見捨てになったのですか」。その声を私たちはいま聞きます。そして私たちも、よいときも悪いときも、この同じ神さまを、「わが神」と呼ぶのです。

結び イエス様を見ていよう

私たちは、今週、受難週を迎えました。出来ることなら十字架の正面に立って、いま、イエス様を見つめましょう。そして、立ち続けて、見つづけていましょう。今週一週間、できるなら十字架の正面に立って、十字架のイエスを見てみましょう。6時間以上、立っていた一人の軍人がいました。その人は「この人はほんとうに神の子だった」と言ったのです。私たちもイエス様の十字架の正面に立って、イエス様を見つづけたいと思います。そんなにずっと立っているなんて、そんなにずっと見ているなんてできない、と思う人もいるでしょう。出来ないなら遠くからでもいいので、イエス様を見上げつづけてみましょう。

女性たちは遠くにいました。遠くから見ている女性たちがいました。その人たちのように、遠くからでもイエス様を見上げましょう。

「エロイ、エロイ」と、きっと大声だったので、遠くにいる女性たちにもその声が聞こえたのではないか。イエス様は、苦しい息の中で、あそこに彼女たちがいる、それを見ながら、思いながら、大きな声をあげたのかもしれませんが。この受難週、イエス様から目を離さずにいましょう。

イエス様は捨てられて答えなく死んでいきます。そうであるならば、私たちも、たとえ答えなく死んでもよいのです。もともと捨てられて当然の私たちです。でも、そういう私たちを捨てたくない、と思ってくださった、神のおこころがわかってきます。捨てられて死んでいくイエス様を見ていると、人間たちを捨てたくなかった、惜しいと思って、背いた私たちを捨てたくなかった、神さまのおこころが分かってきます。

もう私たちは、捨てられることがないのです。たとえ答えがなくても、もう私たちを捨てない神さまに、答えがなくても「わが神」と呼びます。答えがないとき、いまわの時点でさえも、答えない神に、信頼して呼びましょう。「答えをくださらない神よ、それでもあなたは私の神です」と。たとえ、願ったものを得なくても、答えを得なくても、「わが神よ」と呼べれば、生涯さいごの祈りが、これでもよいのです。

祈りをささげましょう。

「イエス様、あなたは十字架上で捨てられ、叫ばれました。その捨てられている中で、わが神、と父と呼ばれました。私たちもいま、先の見えない中、どうなるかわからない、うまくいくかわからない、不安と恐れの中で、わが神、と呼びます。わが神、わが神、なぜ、わたしを捨てたのですか。恐れが来ることがあります。あなたをわが神と呼び続けることができますように。主イエス・キリストの御名によって、お祈りします、アーメン」